報告集

授かるいのち
未来につなごう！

お腹の赤ちゃんとお母さんを応援する社会を

7月13日「生命尊重の日」の集い

令和５年７月１３日（木）

内藤 いづみ
(在宅ホスピス医師)

各界からの提言③・医療

いのちは希望にあふれて生まれてくる

私はいち臨床医ですが、山梨県で30年以上、在宅ホスピスケアに取り組んでまいりました。看取りとは医療的な事だけではなく、本人も、社会も、支える人も、医療者もみんな「いのちって何？」という社会的な学びが重要だというのが私の実感です。大切なのは、その人が受動的ではなく、自分の命の主人公になり得るか、ということです。

ある妊婦さんが「看取りの最後の、みんなで手を握り、背中を撫で『おばあちゃん有難う』と感謝する場面は、私が赤ちゃんを産む時、助産師さんや家族が背中や足を撫でながら、『頑張って産み出すんだよ』と言ってくれた場面とそっくりです」と言いました。生まれて初めてのお風呂を「産湯」と言いますが、亡くなる時には「湯灌」で身を清めて見送られるのです。

あるおばあちゃんは、旅立つ準備が始まりました。号令を掛けると、子ども3人とその孫達が集まり、合宿生活が始まりました。私はおばあちゃんに「今どんな気持ちですか？」と尋ねました。すると、「いつかはこういう日がくると知ってたけれど、それが今ですね？」と言われました。平安時代の在原業平の歌に「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」とありますが、1000 年前の歌人の歌と全く同じことを、山梨の農家のおばあちゃんが最期に言ったのです。

私は孫達を集め、「おばあちゃんは、これからあちらの世界に旅立ちます。でも、君達のおばあちゃんで幸せだったと言ってるよ」「おばあちゃんが亡くなっていく姿は怖い？」と聞いたら、みんな「怖くない。だっておばあちゃんだもの」と。そして、最後にみんなで、おばあちゃんの髪を洗ってあげました。小学生の孫達が、笑顔でシャンプーをします。生きているってことは、涙だけではありません。喜びや悲しみや色んなことが混ぜこぜになったエネルギーの塊の時間なのです。

私はいち臨床医でありながら、いのちから学んだことを、色々な方々に伝える役目を頂いていると感じています。どんないのちも祝福の中で生まれ、去りゆく時は尊厳を持ち感謝して旅立てる、そういう社会のためにお役に立てるよう、これからも頑張りたいと思います。

25年7月13日、「生命尊重の日」の集い